

マイスコープ

カルガモの白変種個体

小千谷市 中山正則



2009年9月16日、地区担当の県鳥獣保護員の方から、市内の茶郷川でカルガモの白い個体を見たので、白変種個体か確認をお願いしたいとの電話連絡があり、翌9月17日の待ち合わせ時間午前8時に茶郷川の観察地点に赴いた。最初、観察されたという場所に行ってみたが、確認できなかった。そこで、下流の方へ行き探してみたがやはり確認できなかった。それでは上流の方へ行ってみると、

カルガモが10羽程度おり、この群れの中に2羽の白変種個体を確認した。体全体が白褐色というよりむしろ白っぽく、腹部などは白色に近かった。上面の次列風切羽は褐色だが、通常見る個体よりは薄い色だった。2008年の秋、市内JR信濃川発電所調整池でも本種の白変種個体を観察している。この観察・確認の後日、同調整池で白変種個体を観察した。(撮影 2010年9月17日)

シジュウカラガン・ハクガンの群れ 観察記

新潟市 高辻 洋

本誌 65 号に「今冬ビッグニュース」として「朝日池に 25 羽のハクガンの群れが渡来」と「福島潟に珍鳥シジュウカラガンの群れ」という記事が載っていましたが、私も去年の暮れから今年の初めにかけて、シジュウカラガンとハクガンの群れに出会うという幸運に恵まれました。

シジュウカラガンの群れに出会ったのは、昨 2009 年 12 月 8 日の福島潟です。私がシジュウカラガンを見たのは 1987 年（昭和 62 年）2 月 1 日の佐潟が初めてですから、それ以来 22 年振りということになります。このときのシジュウカラガンは確か仙台の八木山動物園で人工繁殖したものだと聞いており、「007」という首環が付いていました。首環の番号が独特だったこともあって、佐潟の水面にぼつんと浮いていた姿をよく覚えています（ちなみに、同じ日の佐潟にはコウノ

トリも飛来していました）。

ここ数年、福島潟にときどきシジュウカラガンの群れが飛来し、それが新聞に出たりしていたのですが、その都度駆けつけてもいたためしがありませんでした。行くたびに空振りすると、さすがに「どうもシジュウカラガンには運がないようだ」と探す気も薄れてきます。12 月 8 日もそんな気分で行った福島潟でした。

この日、環境省の観測ステーションに近い土手の上から干拓地を眺めていると、干拓地の北側のはずれにヒシクイの群れが見えました。田んぼ 2 枚くらいに広がっていて、だいたい 300 羽くらいいるように見えました。よく見かけるヒシクイの群れだと思って望遠鏡を立てると、すぐに「ん!？」となってしまいました。何と中にシジュウカラガンが混じっていたのです。



ヒシクイの群れの中のシジュウカラガン



干拓地上空を飛ぶシジュウカラガンの群れ

シジュウカラガンは首から上が黒く、頬が白いので、見るとすぐに分かります。分かるだけでも20羽くらいはいて、そのほかにうつむいているものもいるように見えたため、その数はもっと多そうでした。シジュウカラガンはヒシクイの群れの端っこの方において、餌を採ったりときどき首を上げたりと、ヒシクイと同じような行動をとっていました。

しばらくするとヒシクイの群れの中からはびと群れが舞い上がり、干拓地の上空を旋回し始めました。双眼鏡で見ると、全部シジュウカラガンでした。シジュウカラガンの群れは、今までいた田んぼの上を大きく何回も旋回しました。横一線になったときに数えると43羽でした。

群れはしばらく上空を旋回していましたが、そのうち舞い上がった田んぼから300メートルくらい離れた、同じ干拓地内の田んぼに下りました。飛ばさないように気をつけながら少しずつ車を寄せていくと、運よく50メートルくらいまで近づくことができま

した。そばにはハクチョウが数羽いましたが、ほかにガンはいない、シジュウカラガンの単群でした。

やがてシジュウカラガンは田んぼの中を一直線になってうつむいたまま一直線に進み、田んぼ2、3枚進むと折り返して、同じようにして元へ戻るという動作を繰り返し始めました。落ち穂、二番穂、畔の草などを食べているように見えました。

シジュウカラガンはこうした動作を2時間余り続けていましたが、そのうち食べるものが無くなったのかあるいは同じ場所に飽きたのか、群れは一斉に舞い上がって、今度は少しだけ旋回してから干拓地の南のはずれに舞い下りました。下りたところへ行ってみると、そこにはヒシクイが500羽くらいいて、シジュウカラガンはその中ほどにほぼ一列になって降り立っていました。

探すとなかなか見つからないシジュウカラガンでしたが、格別探す気もないと簡単に目の前に現れて、面白いものだと思います。



田んぼに下り立ったシジュウカラガンの群れ

ハクガン はシジュウカラガンと違って、福島潟や佐潟でもときどき1羽、2羽と出現していたので、私も何度か見ていましたが、朝日池では毎冬30羽くらいの群れが飛来すると聞いて、いずれじっくり見てみたいものだと思っていました。

昨年12月24日に朝日池に行きましたが、このときは200羽くらいのヒシクイ、マガンの出入りは見たものの、ハクガンは空振りでした。朝日池でハクガンの群れに出会ったのは、今年2010年の1月19日です。

朝6時半ころ朝日池に着くと、湖面を見てがっかりしました。湖面は全面シャーベット状で、開けた水面はどこにもありませんでした。これでハクガンが見られなくともカモ、アイサ、カイツブリ類などが見られれば、それはそれで楽しめるだろうという期待も空しくなったわけです。

遠く左手奥のゴルフ場の水辺にヒシクイ、マガン、ハクチョウなどの姿が見えました。所在なく湖面を眺めていると、8時ころからマガン、ヒシクイの出入りが活発になってきて、20羽から30羽くらいで出るもの戻るものが入り乱れるようになりました。

10時から11時にかけてのころが飛び出しが一番活発だったのですが、飛び出しが小止みになった10時半ころ、ふと湖面に目を

やると、白い小さな群れが湖面を低く飛んで行くのが見えました。急いで双眼鏡を覗くと、群れの一つはハクチョウでしたが、もう一つはハクガンでした。ハクガンは5羽で、東の方角へと飛び立っていくところでした。

何とか5羽のハクガンを写して、これで来



田んぼの畦で休むシジュウカラガン



飛び立つ5羽のハクガン

た目的は一応達したことになったわけですが、朝日池のハクガンはもっと多いと聞いています。待つて出るのかは分かりませんが、群れの出現をもう少し待つてみることにしました。日が昇るにつれてポカポカと暖かくなってきて、眠気を抑えながらいつ出るとも分からないハクガンの群れを待つのは大変でした。

待つこと4時間、午後2時32分でした。突然もの凄いヒシクイ、マガンの鳴き声があたりに響き渡りました。何が起きたかはすぐに分かりました。東の方角からヒシクイ、マガンの大群が戻ってきたのでした。500羽からともすれば1千羽はいるのではないかという大群でした。群れは竿になり鉤になり、幾重にも重なってゆっくりと押し寄せるように飛んできました。

突然の出来事に浮足立って双眼鏡を覗くと、群れの中に白い点が一つ見えました、マガンの列について飛ぶ1羽のハクガンでした。次いで2羽、4羽と、ヒシクイ、マガンに混じって飛ぶハクガンが見えました。さらに群れを見まわしていると、ついに白い集団が目に入りました。ハクガンの群れでした。28羽いました。ハクガンは大群の一角でひ

と群れになって飛んでいて、近づくとつれて隊列を変え、一直線になったり、塊になったり、鉤の手になったりしました。白い体と翼先端の黒のコントラストが目鮮やかでした。あたかも雁のプラネタリウムを音響付きで見ているような、実にエキサイティングな光景でした。

大群はいったんゴルフ場の方へと向かいましたが、そのまま着地せず折り返して来ました。ハクガンも一緒になって折り返してきて、大群全体で池の上空を大きく1回旋回してから再びゴルフ場の方へ飛んでいき、水辺に着地しました。

群れが下りてしまうと、あたりは何事もなくったようにしんと元へ戻りました。わずかに5分ほどの間の出来事でしたが、これほどの光景が見られるとは思っていませんでしたので、何か快挙を達成したような晴れ晴れとした気分になりました。

今シーズンの朝日池のハクガンは全部で34羽と聞いていましたが、私が写した写真には1羽、2羽、4羽と28羽の群れが別々に写っていました。重複して写したものは無かったように思うので、当日は全部で35羽のハクガンがいたようでした。



朝日池へ戻ってきたハクガンの群れ

スズメの個体数変化を調べる

上越市 樋山 貴洋

はじめに

スズメは、昔から様々な童話や童謡に登場したり、和歌に詠まれたりするなど、古くから人間に親しまれてきた鳥である。また、スズメは、人間の生活の中にとけ込み、人間に依存することで生息地を広げてきた。

言うまでもなく、スズメは、1年中見られる鳥、すなわち留鳥である。しかし、多雪地域では、冬に個体数が減少することから、成鳥の移動が示唆されている。また、足環をつけた幼鳥の中には、出生地からかなりの距離を移動する個体がいることも知られている。上越地域は日本有数の豪雪地帯であり、冬季はスズメの採食地となる地上のほとんどが雪に覆われる。そこで、1年間を通してスズメの個体数や群れサイズが、どのように変化するのか上越教育大学構内でラインセンサス法を用いて調べてみた。

個体数

繁殖期にあたる3月から4月の個体数は大きな変動をしないが、5月4週目から急激に増加するとともに幼鳥が数多く観察されるようになった。3月3週目(47羽)に比べると、個体数のピークにあたる7月1週目(107羽)は、2.3倍の増加である。その後、個体数は、7月4週目から急激な減少に転じた。一方、秋から冬、そして12月から2月においても、個体数に大差はなく観察された。

群れサイズ

どの季節も、スズメは基本的に1羽もしくは2羽で観察されることが多かったが、3羽以上の群れサイズには季節的な変動が見られた。群れサイズは、冬に大きくなる傾向が見られ、他の時期に比べ15羽以上で行動している割合が高くなっている。特に1月1週目、

12月1週目には50羽を越える群れで行動している場合も観察された。

繁殖期の3月から4月は2羽のペアで観察されることが多く、6月から8月は、3～7羽で親鳥と幼鳥が一緒に行動をしている様子が頻繁に観察された。繁殖期終盤から秋にかけて、徐々に群れサイズが大きくなった。

おわりに

この観察は、2009年に行なったものであるが、雪の多かった2010年も継続して行なったところ、積雪期に個体数は大幅に減少した。このため、大雪は、スズメの個体数に与える影響はとても強いと思われる。

スズメは、身近な鳥であるため、あまり観察されていないが、実際に継続して観察を行なうと、実に面白い鳥である。



図1. スズメの交尾



図2. 巣箱への巣材運び

第 22 回 研究発表会 「雪国の鳥を訪ねて」

今年度の研究発表会が1月24日に県立自然科学館で科学館と共催で行われ、多数の会員が参加しました。

最初の演題は千葉晃氏による「海ガモ類の配偶行動、特にウミアイサとホオジロガモを例として」でした。海ガモ類は数も少なく、生息場所も寒風が厳しい海岸です。そのような場所にのべ43日間も通い観察を続け、写真で記録し解析した内容でした。求愛行動にはつがいの形成、同性の排除、交尾の誘導の3つの役目があるそうです。ウミアイサの求愛行動には「かまえ」「くびふり」「水はね」などが見られ、交尾の際には尾を立てる行動などが見られるといます。またエクリプス羽の個体でも求愛行動が見られるなど貴重な発見があったそうです(右上)。

次の演題は渡辺央氏による「中之島の田圃で越冬するマガン」でした。マガンは福島潟と朝日池のように湖沼のあるところだけで見られると思っていましたが、中之島のような湖沼のないところで多数の個体が観察できることは驚きでした。ねぐらは渡来初期の海の荒れていない日には海上ですが、厳冬期になるとほとんど田圃だそうです。広大な田園地帯である中之島も近年人の影響を受けており、田圃を秋に耕したところではよりつかず、そのまま放置された田圃で餌をとるそうです(右中)。

最後の演題は石部久氏による「雪国おけるブナ帯の鳥類群集について」でした。調査は阿賀町の広大な地域で行われました。古くは広くブナが分布していたようですが、今では標高の低い場所では薪炭林が成長したコナラなどの落葉広葉樹が普通です。1999～2007年の長期にわたりこの地域の観察を続け、年間のどの時期にどんな鳥が生息しているかを明らかにしました。多雪地域なので雪



により生態が影響を受け、冬季には雪に覆われていない幹や小枝で採食できるキツキ類やカラ類が確認され、キビタキなど夏鳥では雪が消えるに伴って高い標高に動いていくそうです。近年温暖化の影響が鳥の生息に影響を与えているらしく、以前冬季にはあまり見られなかったカワセミがよく見られるようになったそうです(右下)。

いずれも雪国新潟にふさわしいテーマをとりあげた興味深い発表でした。(研究部・小池)

サシバの求愛行動

新潟市 岡田 成弘

サシバ (*Butastur indicus*) の求愛行動を観察したので報告する。2009年4月3日13時、冷たい風が残る早春の阿賀町で山里を飛ぶサシバを発見した(その年の初認であ

った)。サシバは棚田を見下ろす木の枝に止まり(図1)、水田を見つめていた。25分後、枝を蹴って飛び降り(図2)、水田の畔でヤマアカガエルの成体を捕えた(図3)。その



図1. 木に止まり下方の水田を見続けるオス



図4. すぐにメス(右)が現れ、捕えたカエルを渡す



図2. 枝を蹴って水田に飛び降りる



図5. カエルを渡したオスが飛び立つ



図3. 着地と同時にヤマアカガエル成体を捕える



図6. 水田周辺の木に向かって移動するオス

まま食べるものと思ったところ、もう1羽が現れ、カエルを受け取る求愛給餌行動を行った(図4)。しばらくするとそれぞれの個体が別々に飛び立ち(図5, 6)、水田を取り囲む木の枝に離れて止まった(図7)。1羽を観察していると、もう1羽(オスと思われる)が背後から飛来し、交尾行動を行った(図8~12)。下になっている個体(メスと思われる)が尾を上げていないことから、擬

交尾であると考えられる。オスの飛来から擬交尾を終えるまでわずか3秒ほどの行動であった。越冬地である南方の国から渡ってきて繁殖地に到着したばかりであろう時に、他の両生・爬虫類よりも早く越冬から目覚めて活動を始めるヤマアカガエルを巧みに捕え、求愛行動を行うサシバの生態を垣間見ることができ、鳥たちの生命力のたくましさと、山里の豊かな自然を感じ取ることができた。



図7. メスも別の木に移動



図10. 擬交尾



図8. 離れた木に止まっていたオスがメスの背後から飛来



図11. メスが振り向く



図9. オスがメスの背中に乗ろうとする



図12. 2羽が離れる

厳冬の寺泊港・出雲崎港探鳥会

長岡市 加藤 宏 康

2月7日に開催された寺泊港・出雲崎港探鳥会に参加しました。JR長岡駅前からバスに1時間余り乗って寺泊港に着きます。集会所の文化センター「はまなす」に向かって歩いていく途中には「魚のアメ横」と呼ばれる魚の市場通りがあり、漁港としての活気を感じられます。どんよりとした曇り空の中、時おりみぞれや雨交じりの天候でしたが、私にとっては初めての日本海の家鳥の観察ということで楽しいひとときを過ごすことができました。

10時過ぎに始まった探鳥会は車で移動することになります。マイカーを持っていないため、伊藤さんの車に同乗させていただきました。寺泊港でまず観察したのはコンクリートブロックの上でのんびりと休んでいる4羽ほどのヒメウ。「こんなに近くで見られるのは珍しい」という話を聞きました。堤防に止まるハヤブサも観察できました。

少し先にある寺泊水族博物館の前ではウミアイサとともに、ウミネコの群れなどのカモメ類が比較的多く見られました。水族博物館ではカモメ類に餌でも与えていたことがあるのでしょうか。水族博物館を一度見学してみたいと思います。

さて、車は出雲崎に向かいます。寺泊から出雲崎に入ると、「雪が途端に少なくなる」

と教えてもらいました。海沿いの道路脇に注意して見ていると、「イソヒヨドリが止まっていることがよくある」ということです。砂浜が続く海岸線は「天気良ければサーファーでにぎわう所で、探鳥には向かない」という話ですが、この日は海も荒れていて砂浜にシギ・チドリの仲間も見当たりませんでした。

出雲崎漁港ではミミカイツブリが確認できました。最後に立ち寄った道の駅・越後出雲崎「天領の里」ではイソヒヨドリが飛び交い、全部で30種類の野鳥が観察されました。道の駅にはコシアカツバメの巣が残っていることを教えてもらいました。

「天領の里」の2階でも冬のタラ汁を販売していました。この辺では冬の名物料理なのでしょうか。「はまなす」に戻って野鳥の会で作っていただいたタラ汁をたらふく食べさせてもらい、厳冬の探鳥会で冷え切った体もすっかり温まりました。

北海道東部のほか銚子港（千葉県）や波崎港（茨城県）で海鳥を見に行ったことがありますが、寺泊港・出雲崎港はカモメ類を筆頭に個体数も種数も少ない気がします。魚のアメ横でも近海物と思われる鮮魚をほとんど見かけませんでした。近海漁業に活気がみられないと海鳥も少なくなるのでしょうか。



出雲崎港での探鳥風景



ウミアイサの雌雄

冬の晴れ間のひととき

魚沼市 桑原 哲哉

2009 冬のシーズンは大雪で道路両側とも積雪 1m 以上ある白い壁に阻まれ、鳥はおろか周囲の様子は分からない状態です。そんな中で数少ない探鳥ポイントは橋から見るバードウォッチングです。

休日にしては珍しく晴れた 2 月下旬、破間川沿いの探鳥ポイントからヤマセミの観察を始めました。とたんにハシボソガラスが妙に騒ぎ始め、川沿いの杉林からカラスに追われたオオタカがいきおい良く飛び出してきました。この行動を記録写真に収めることができたので紹介したいと思います。

カラスのモビングは猛禽類やフクロウの仲間に対するものが知られており、特にオオタカ類はカラスを捕食することがあり、猛禽類の中でもカラスのオオタカに対するモビング

は多くの観察例があります。この時もかなり執拗にモビングを繰り返しました。約 20 分間に観察できたハシボソガラスのモビングのパターンは主に次の 3 つでした。

1. 後方から追尾する追跡飛行
2. 至近距離に接近しての平行飛行
3. 下から威嚇する背面飛行

厳冬期のオオタカは観察記録が多くあるため、写真をよく見るまではオオタカと間違っていました。しかし、注意して見ると頭も大きさ、尾の長さ、初列風切り羽の形や色、ハシボソガラスとの大きさの比較からハイタカの♀タイプと同定しました。

改めて猛禽類の観察の難しさと楽しさを味わうことができ、大雪の晴れ間に感謝しています。



ハシボソガラス（左側の黒い鳥）の追跡を受ける



水面すれすれに至近距離で
平行飛行してモビングするカラス



仰向けに飛び、足を蹴り上げて威嚇するハシブトガラス



写真を解像してみるとオオタカではなく、ハイタカの特徴がハッキリしている個体

発行 2010年3月31日 No.69
発行人 大島 基 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号
TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002